

犬らしく・猫らしく・人らしく

－家族以外の関わり方から生まれる新しい交流施設の提案－





背景

「犬・猫・人」

多くの犬・猫に近い存在で生活してきた。共に過

目的

「飼う or 飼わないではなく、家族として迎える他に新しい関わり方の選

択肢を増やす場を構築する」

対象敷地

鹿子公園（森化した斜面の活用）

所在地：名古屋市千種区鹿子殿 1-30

隣接して平和公園や動物愛護センターがある。

公園内はペットと共に利用することができ、自然豊かで幅広い年齢層の利用が見られた。

大きな特徴は猫ヶ洞池・動物愛護センターにかけて広がる斜面と森化した場所だ。

○名古屋市動物愛護センターについて○

愛護館は平日一般公開されている。

周辺は木々に囲まれ暗い印象がある。両方の公園から階段でアクセス可能だが、奥まった立地にあることから人通りは閑散としていた。

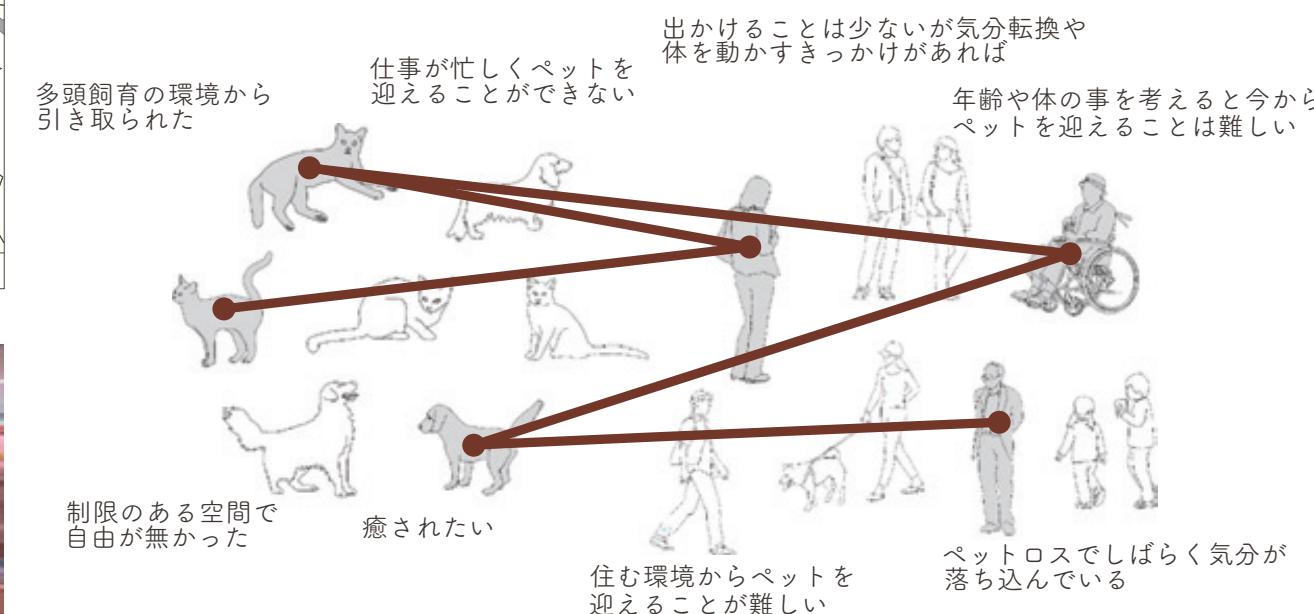


コンセプト（関わり方・ターゲット）

「○○らしさ、距離感を大切にする」

各々の個性や行動を可能にする場所があることで魅力を際立たせたり新しい発見が双方に生まれると考えた。

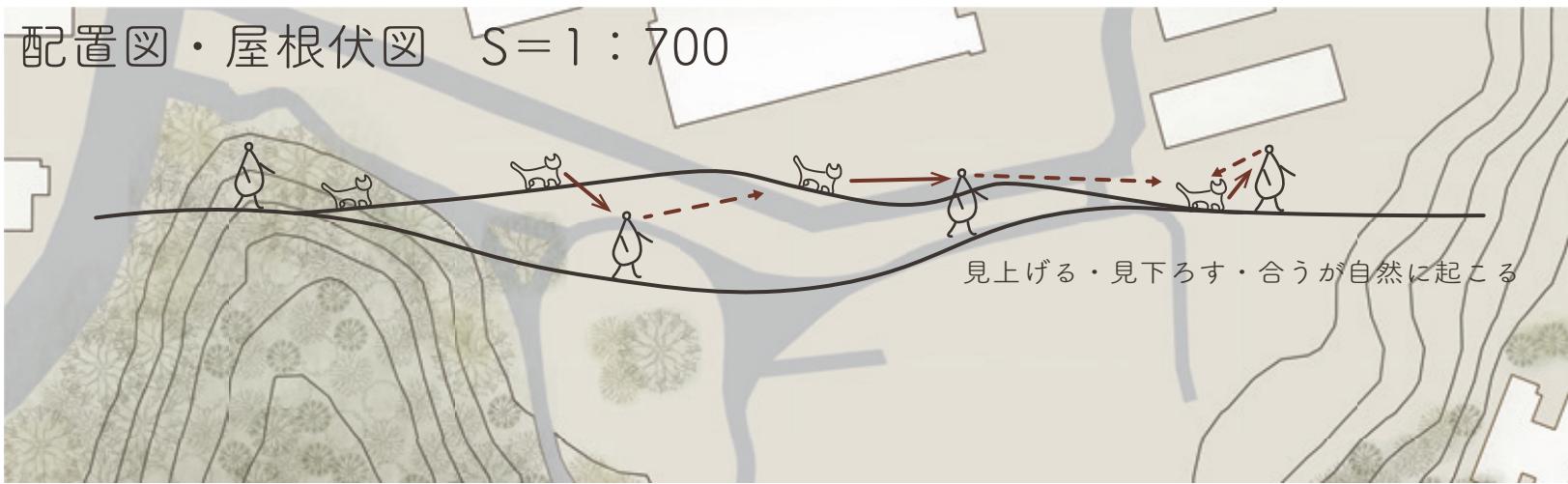
通り過ぎる・通う・ふれあう・滞在する…



各エリアの提案・レベル1、2の例

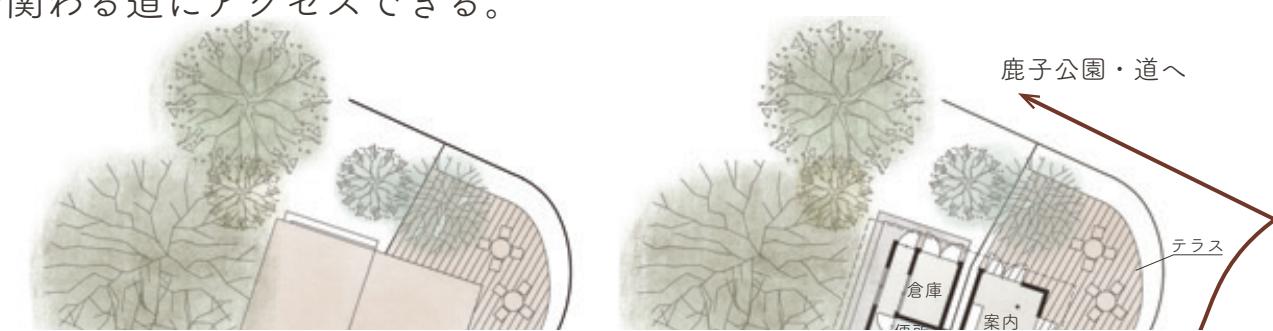
各レベルには広場やツールで関わるポイントを設ける。

配置図・屋根伏図 S=1:700



レベル1 交流が生まれるアプローチ 平面図 S=1:150

木々が生い茂り暗い印象だった動物愛護センターと鹿子公園へのアプローチは、新たにセンターの別館として活動や情報を共有できる場を設けることで公園や関わる道にアクセスできる。



日々の生活に近い住で生活してきました。共に過ごすことで癒しを感じる人も多い。しかし、近い存在であるからこそ飼育放棄や保護施設への引きとりが後を絶たず、殺処分も無くならない現状がある。

拡張を増やす場を構築する

保護施設にやってくる犬や猫の事情は様々である。家族を見つけて施設を旅立つことで幸せになれるという考え方を持つ人が多いのではないか。しかし、全ての人が家族として迎える環境（仕事や住環境等）が整っているとは限らない。全ての犬や猫に愛される権利があるにも関わらず、家族として旅立つことだけが本当に幸せなのか…

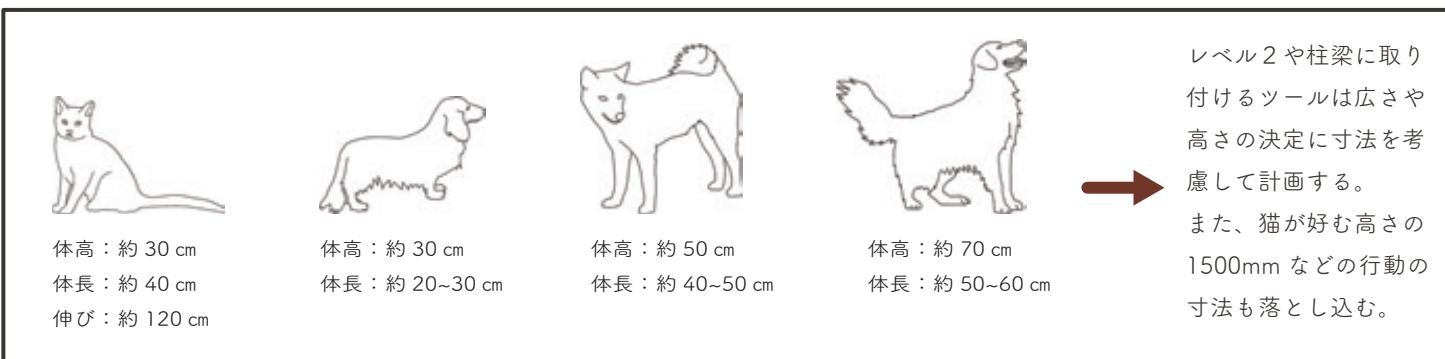
ダイアグラム・プロセス



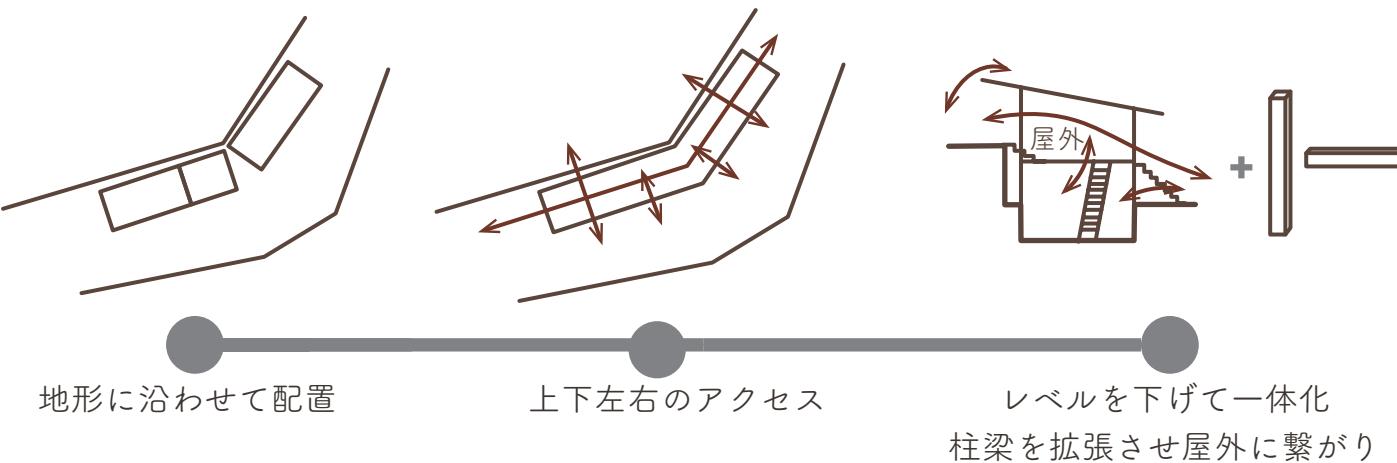
敷地の特徴である斜面を生かし、木々で閉ざされてしまっていた道をセンターと新たにつなげ、関わりの深さをレベル分けする事で関わり方を選択できるようにする。



○犬・猫の寸法を取り入れる



○レベル3の滞在空間ダイアグラム



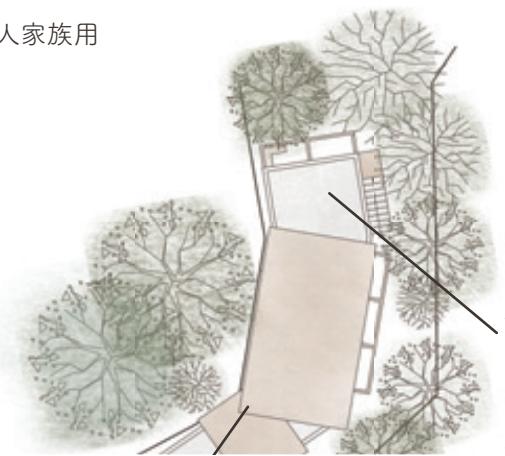
各エリアの提案・レベル3の図面、シーン

レベル3 滞在エリア 平面図 S=1:150

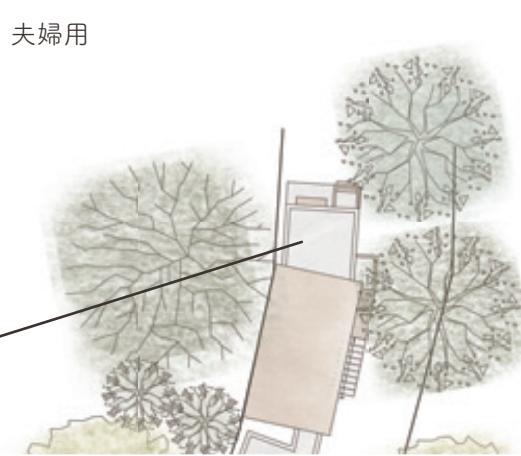
屋根は片流れにし、人が過ごす場所は大きな屋根かけ、重なりや犬猫の体高を考え高さを出す。

4

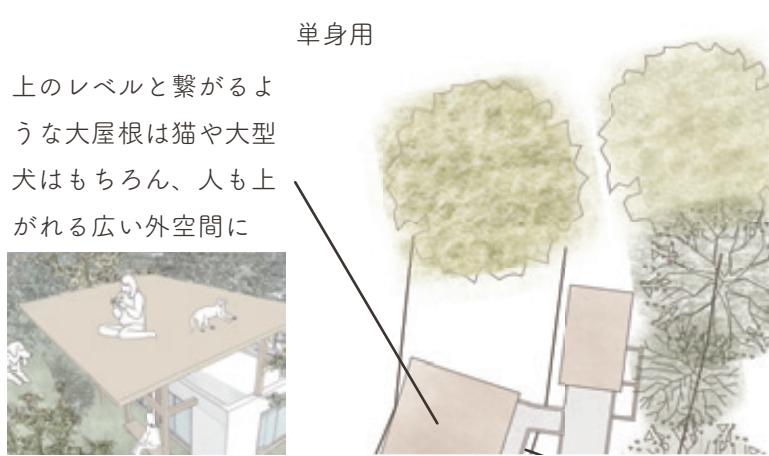
○家族と楽しみ外と繋がる



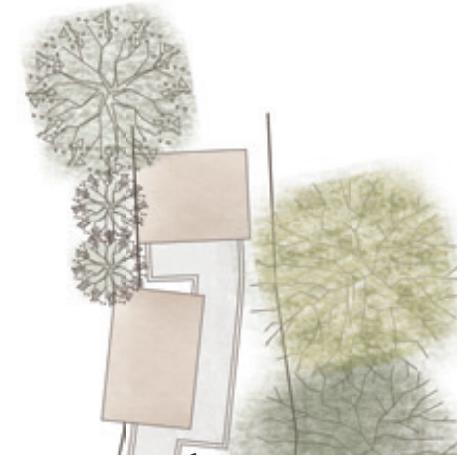
○2人の時間をゆっくり・のんびり



○1人でも皆がいる



○バリアフリーな暮らし

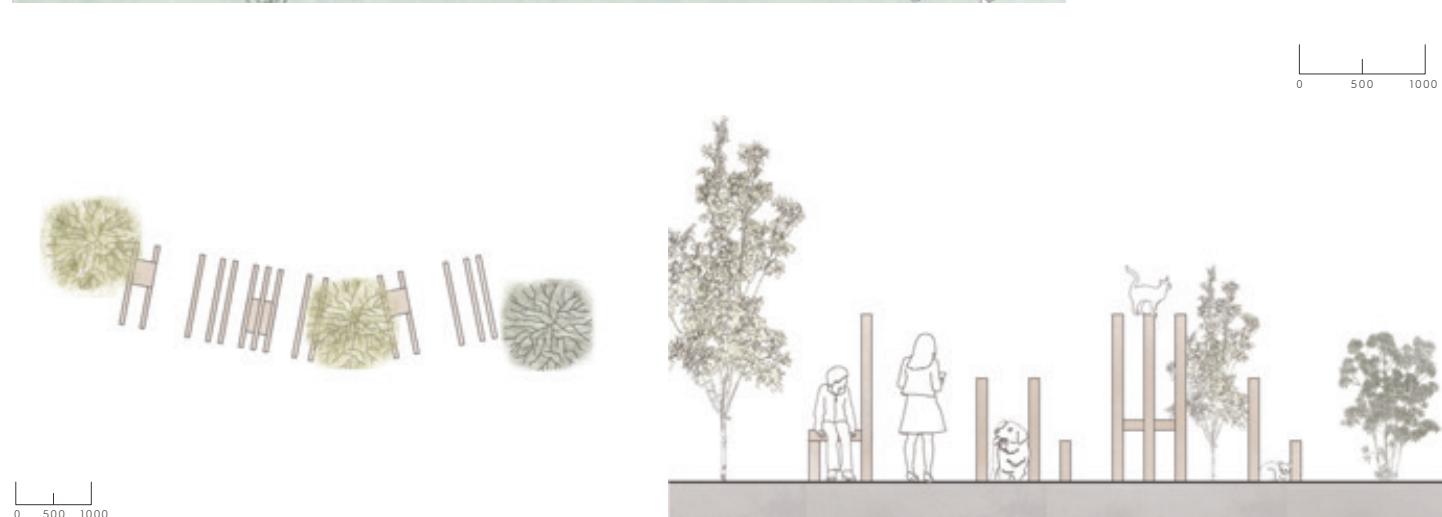
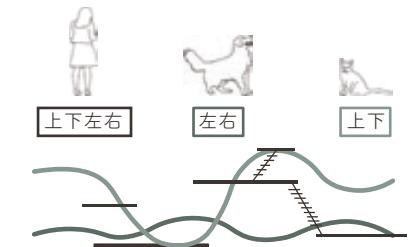


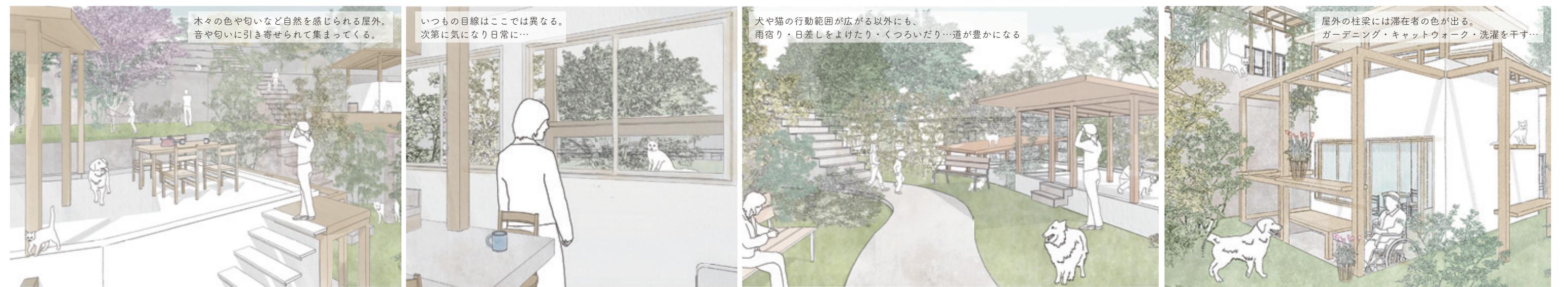


レベル2 凸凹広場 平面図 S=1:50 断面図 S=1:30



レベル2 森のかべ 平面図 S=1:50 断面図 S=1:30





断面図 S=1:150

3~4人用 A-A' 断面図 屋内外の繋がり

0 910 1820



夫婦用 B-B' 断面図 左右の繋がり

0 910 1820



立面図 S=1:150

バリアフリー 東側 立面図

0 910 1820



滞在エリアは、地面から下げて配置する。

目線は外部の犬や猫と合い、上下を緩く繋ぐ役割を果たす。

しゃがんで下から覗いてみたり、窓を開けて呼んでみたり、道を歩く人とも犬や猫から会話が生まれ・屋根の下で交流できる。